

2009 年秋のアユの成育環境

酒井明久

1. 研究目的

秋の琵琶湖の環境は、アユの初期減耗や成長に影響を与えると考えられる。そこで、2009 年秋のアユの成育環境を評価する目的で、プランクトン量と濁りの指標値を測定し、2008 年と比較した。

2. 研究方法

姉川・安曇川ライン上に設けた 3 定点において、9 月下旬から 11 月下旬までに延べ 5 回、水深 20m 以浅のプランクトン密度と水深 30m 以浅の強熱残留物を観測した。

3. 研究結果

動物プランクトン密度は、2009 年にはノープリウス幼生が 9 月下旬から 11 月上旬まで前

年の約 2 倍、コペポディッド期以降のカイアシ類およびミジンコ類の密度も 11 月上旬には前年より高かった(図 1)。

濁りの指標値として測定した強熱残留物は、2009 年には 10 月 8 日の台風通過後、前年には見られなかった極大値を記録した(図 2)。

4. 研究成果

観測データはアユの成長や生残に影響を与える環境要因を検討するための基礎資料となる。

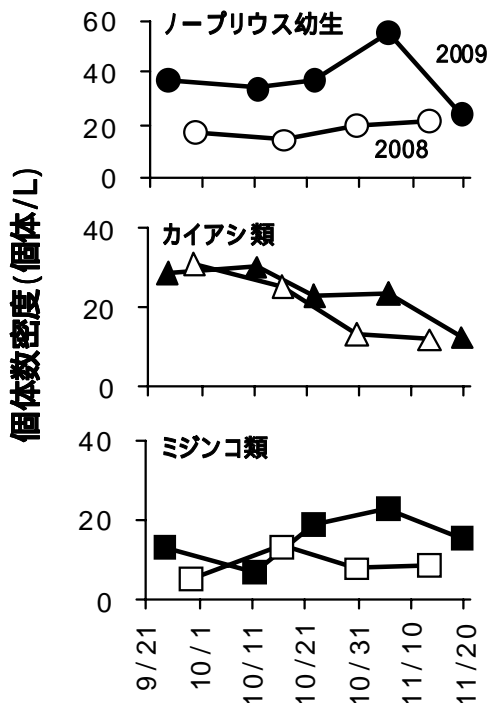


図1 動物プランクトン密度の動態.

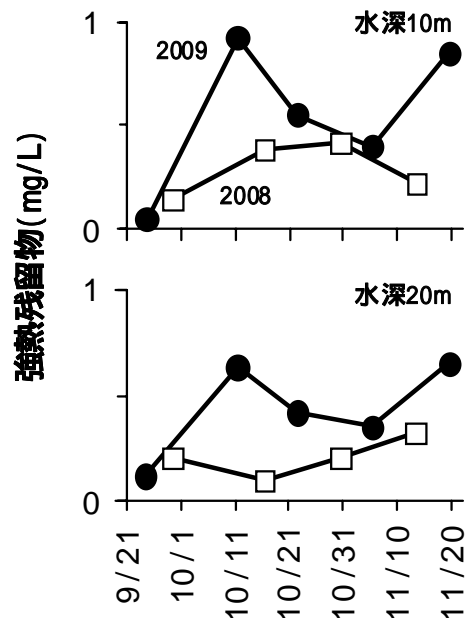


図2 琵琶湖の濁りの動態.